

『心賦』と『註心賦』の諸本と系統

椎名宏雄

一 問題点

駒澤大学図書館の一般書架中に、永明延寿の撰述にかかる『心賦』の五山版らしき小冊子（影印）一冊が架蔵されてい るのを見かけたのは、今から数年前のことであった。影印の

原本である実物は、同図書館に貴重書として別置されているが、調べてみると、その所蔵はすでに古く昭和五一年であることを知った。巻末には元代の跋とわが応永年間の木記がみられるが、いわゆる五山の寺院から開版されたものではないらしい。

こんな疑問をいだいたまま、いたずらに多年が経過してしまった。最近になって、あらためて当該の貴重書を閲覧し、またその写真焼付をしてもらい、それにもとづく精査検討をくわえたところ、意外にも驚くべき事実がわかつてきた。駒大本一冊は、五山版として包括される諸版の中でも、室町期の地方版として異彩を放つ大内版『藏乘法數』なる仏書の近世初頭頃の覆刻版であり、しかもその一部を改造した偽造本と認められるにいたつたからである。

五山版の研究では最高の業績である川瀬一馬氏の『五山版の研究』には、この『心賦』は著録されていない。川瀬氏は五山版の対象として、「五山並びに禪宗關係者」によつて、鎌倉・室町期に刊行された書籍⁽¹⁾と定義しているから、同書に未載であると五山版であることをいちおう疑いたくなる。し

賦した作品である。また延寿が、その韻文の各句一々に対して、みずから経論や祖論などによる詳細な注釈をくわえたのが『註心賦』（または『心賦註』）四巻である。これらの両著は、『宗鏡錄』百巻が根基とする一心為宗の宗旨を詠賦によつて端的に説示し、またその帰趣をさらに明確に知らしめるための著作、といわれている。⁽³⁾

ともあれ、両著のうちで『註心賦』は古くから刊行され、明末の嘉興蔵に入蔵してからは、清朝の竜藏やわが近代の正統蔵にも収められて比較的重要な禅籍の扱いとされている。

これに対して、『心賦』だけを単行した現存書を筆者は寡聞にして知らない。こうした事実は、碩学による原著と付注本の両者がある場合、世の需めがいざれにあるかを教える好例であろう。

ところで、延寿の著述については、知るとおり『智覺禪師自行錄』には六一種一八二巻の書目が著録されている。⁽⁴⁾しかし、その中でこんにち伝世するものは、『宗鏡錄』をはじめとして一一種にすぎず、そのほかに『自行錄』には不載ながら伝存する『註心賦』や『念佛訣』などをくわえても、合計二〇種である。

延寿の中国仏教史上における地位はもとより、半島や本邦におよぼした大きな影響を考えると、右の伝存文献の数は意外に少いといえるが、それにもかかわらず、これら伝存文献

の基礎的な書誌的研究はまだほとんどなされていない。延寿の思想に関する総合的な研究は重要であるが、それが進展しない大きな要因はこのあたりにあると思われるのである。

筆者は、古版禅籍の文献史的総合研究という立場からではあるが、延寿の著作についてはせめて入蔵文献だけでも俎上に乗せる必要を感じてすでに久しい。しかし、『宗鏡錄』や『万善同帰集』については宋版の諸大蔵経本が容易に見られぬこと、『註心賦』については北京図書館に所蔵される宋版と元版の閲覧機会がないことから、いざれも部分的考察であつて総合的には未検討のままであつた。

ところが、『註心賦』についてはソウルで刊行された『全国寺刹所蔵木板集』によつて、これまでまったく知られていない高麗版が高麗大学に所蔵されていることを知り、韓国の畏友鄭性本博士をわざらわして、該書の写真版を入手できなかつて打診を請めた。すると予想に反して、なんと当該テキスト全冊のコピーが博士から送られてきたのである。それは一九九一年の暮のことであった。貴重書の複写に労苦をわざらわされた博士に対しては、ただただ心から深謝申しあげるしだいである。

この高麗版は、宋版の面影をまのあたりに伝える覆宋版の善本である。かくして、未見の北京図書館所蔵の宋版はほぼ推察がつく。また元版についても他に説する資料を見いだ

している。こんなことから、『心賦』の大内版調査を期して、『心賦』と『註心賦』について、古版類の紹介を中心としながら、原本の成立と各テキスト類の系統や関係、流傳の状況等についての総合的な検討をくわえるのが小稿の意図するところである。

ここで『心賦』と『註心賦』の別に、伝存しない版をも含めて、各テキストを一覧しておこう。なお、『心賦』の中には便宜上、比較的古く重要な筆写本一本を含めておく。また、近年に大蔵経を影印・再印などしたテキスト類は、その対象から除外した。

『心賦』の諸本

No.	仮 称	刊 写 時	西 曆	刊 行 者 等	所 在
①	元 版	至正二〇	一三六〇	永如刊『藏乘法数』附刻	
②	大内版	応永一七	一四一〇	大内盛見刊『藏乘法数』附刻	国会、東洋、蓬左
③	朝鮮本	万曆一〇	一五七三〇	義仁跋刊	
④	明 版	（慶長頃） （萬曆一八）	一五九〇	王世貞序刊	
⑤	覆 刻 本	（慶長頃） （一五六六年）	一五六一四	大内版の覆刻	
⑥	永 久 本	（近世初） （雍正一三） （乾隆一三）	一七三五〇 一七三五八	連山交易序 『御選語錄』卷八所収	東洋（二本）、成竇（）、駒大
⑦	御 選 本				駒大
⑧	心 髓 本	光緒一三	一八八七	『仏祖心髓』卷六所収	駒大

『註心賦』の諸本

No.	仮 称	刊 時	西 曆	刊 行 者 等	所 在
①	初 刻 本	（北宋期）			北京図（卷四存一冊）
②	南宋版	紹興三〇	一一六〇	行拱重開	

③	元版			周叔弢跋	北京図
④	洪武本	洪武一一	一三七八	翠山妙叶刊	
⑤	高麗版	〃三〇	一三九七	朝鮮、無学自超刊	高麗大
⑥	嘉興藏本	崇禎一七	一六二八 一六三四	径山化城寺	明統藏四〇一六
⑦	寛文本	寛文三	一六六三	京都村上勘兵衛	
⑧	合刻本	雍正一一	一七三三	「万善同帰集」合刻	駒大
⑨	竜藏本	雍正一二 乾隆三	一七三五 一七三八	北京賢良寺	竜藏〔郡〕六九
⑩	光緒本	光緒三	一八七七	金陵刻經處	駒大
⑪	統藏本	明治四四	一九一	京都藏經書院	正統藏二一一六一一（新六三）

二 大内版『藏乘法数』と『心賦』

原跋と応永一七年（一四一〇）の木記刊語等がある。旧蔵印や識語は皆無である。

駒大所蔵の『心賦』一冊を調査検討する過程で、筆者は必然的に大内版の『藏乘法数』という稀書を調査することになり、『心賦』に関する新しい事実が次々に解明されるにいたった。したがつて、ここでは順序として、たとい偽造書ではあっても『心賦』の単独書として存在している駒大本について、まずその現状について紹介することからはじめたい。

駒大本は、全一二紙から成る小冊子である。書誌的な特徴といえば、四周双辺、有界、毎半葉一三行、一行二六一二八字。版心は線黒口、黒魚尾。巻末に至正二〇年（一三六〇）の

注意すべきは、版心と、巻末の原跋以下の部分である。まづ、版心は各丁とも上部黒魚尾の下に「法数」と刻記され、下部の丁数は無刻である。また、原跋一〇行のうち、第四行目の下部五字が無刻、木記刊語九行のうち、第三行目の「心賦」の一字が黒く汚れ、前後の文が難解となつていて、この木記の丁にはさらに左端下部に小木記があるが、「無」の下は虫損で解読不能である。

右のような特徴により、なぜ『心賦』の版心に「法数」と刻され丁数がないのか、また原跋の無刻部分はなぜか、木記

の刊語はどう解説しても不自然な文章であるのはなぜか、という多くの疑問が抱かれるものである。さらにいえば、刊語の前におかれる原跋には、『心賦』を巻末に附すると述べている。これはいつたい何を意味するのか。

以上の疑問点により、筆者は「法數」を手がかりに調査したところ、前記『五山版の研究』上巻に『藏乘法數』が紹介されていることに気づいた。すなわち、元代可遂の重修にかかる『藏乘法數』一巻には、応永一七年刊の大内版とそれを寛永頃に覆刻した覆刻版の別があり、前者は蓬左文庫と国立国会図書館に所蔵され、他はみな覆刻版である。⁽⁶⁾ そして、『五山版の研究』下巻には、国会図書館本『藏乘法數』の巻首と巻尾の写真各一葉づつを掲載している。⁽⁷⁾ この巻尾写真をよく見ると、駒大本の木記で難解であった部分は「藏□心賦」ではなく、「藏乘法數」とあるではないか。

なお、『^{所蔵}国立国会図書館貴重書解題』第一巻⁽⁸⁾にも右の『藏乘法數』大内版の詳細な解題と木記の写真が掲載されている。さらに、『岩崎文庫貴重書解題』Iにより、東洋文庫には三本の『藏乘法數』が所蔵され、そのうちの一本は正真の大内版、二本が覆刻版であることや、大内版の解題と巻首巻尾の写真があることなどを知ったのである。

ところが、これらの解題中には、いずれも『心賦』にはふれるところがない。したがって、解題のみでは『心賦』の存

否さえも未詳なのである。わずかに、東洋文庫の目録中に

藏乘法數一巻安堵永明寿禪師心賦一巻⁽¹⁰⁾

となるのを見出して、安堵の胸をなでおろしたほどである。かくして、国会図書館本と東洋文庫本（覆刻本とも）を閲覧したところ、たしかにみな『心賦』は附刻されていた。

ともあれ、大内版の『心賦』については、これまでにいかなる学術的考察も紹介もなされていないようである。いま、その基礎をなす書誌的な検討をくわえる前に、どうしても前提となる作業は、この『藏乘法數』大内版に対する理解である。こうした観点から、まず『藏乘法數』に対する先学の解題を、もつとも要をえていると思われる国会図書館本のそれによつて引いておこう。

元、可遂重集。応永一七年（一四一〇）大内盛見刊。大きさ二三・九×一七センチメートル。紙数五五丁。匡郭左右双边。郭内二〇・七×一二・六センチメートル。有界。二三行二六字。表紙・題簽共に近時の補装で、灰褐色の薄い布表紙、角切れを用いている。現状の遊び紙の次に原表紙と思われるものがあるが、厚手の楮紙で、表面はこすれて色は無く、原状をうかがうことが出来ない。

刊語（木記、郭内二三×一〇・四センチメートル）に曰う、

比丘靈通修禪之暇古教照心嘗
患法義有未解了而杞吾口者偶

獲逐師藏乘法数若法若義瞭然

在目乃欲流通是書与天下学者

共之今周州大先道雄居士欣然

施財命工以寿于梓使覽者乃知

禪不異教教不異禪禪教双思而

超言數之表寔有補於宗門者也

応永庚寅二月比丘靈通謹白。

右刊語の丁の左方下隅に「無板貸」の刻がある。刊行者大先道雄

居士は大内盛見で、義弘の弟に当り、大内版として知られる「聚

分韻略」その他を刊行している。

藏乘法数は、仏教における名数を説明したもので、大内版の伝本

は稀である。

印記「漳珠」「章寬」。⁽¹¹⁾第一葉の長方形旧藏印一個は墨で塗沫され

ている。(図版一五頁)

右にのべられるように、当該の『藏乘法数』は応永一七年(一四一〇)、靈通なる禪僧が周防(山口)大内盛見の施財によって刊行した大内版であつた。大内版については、右の解題でも若干ふれているが、さらに補足しておこう。

とりわけ、1の可遂による自序と4の余闕による後序は、

『藏乘法数』の編集と刊行に関する重要な事項をのべている。⁽¹²⁾いま、この二つを合わせて書誌的な内容を要約すると、およそつきのようになろう。

が枠型本『聚分韻略』を刊行している。⁽¹²⁾

こうした珍しい大内版の中に、なぜ『心賦』が入れられたのであらうか。それは、この大内版が底本とした元版にすでに附刻されていたからである。その元版を知るためからも、大内版『藏乘法数』の内容構成を一覧してみよう。

- | | |
|------------|------------------|
| 1 藏乘法数序 | 元統二年(一三三四)四月、可遂撰 |
| 2 藏乘法数(本文) | 可遂重集 |
| 3 心賦(本文) | |

- | | |
|----------|-----------------|
| 4 藏乘法数後序 | 元統二年五月、余闕撰 |
| 5 原跋 | 至正二〇年(一三六〇)、永如撰 |
| 6 刊語 | 応永一七年(一四一〇)、靈通撰 |
| 7 木記 | 「無板貸」 |

従来、先徳の著した「法数」があつたが、無学文公がこれを新たに刊行するにあたって、西菴可遂に較正を依頼した。西菴は旧本八年には『論語集解』一〇巻、天文八年(一五三九)には義隆

を補欠修訂して、『蔵乘法数』と名づけた。そこで無学は何千貫かの淨財によつてこれを刊行した。

右のように、この二つの序跋は『蔵乘法数』が初刻された際に撰述されたものである。無学文公は未詳であるが、注目すべきは、跋を書いた余闕と西菴の関係である。

余闕（一三〇三～一三五八）は廬州（安徽省合肥）の人で、のちに礼部員外郎や淮南行省左丞に任じている。⁽¹⁴⁾ この人の文章を集めた『青陽先生文集』には、右の跋文とともに「題永明智覺寿禪師唯心訣後」⁽¹⁵⁾という一文が記録されている。いうまでもなく、『心賦』と同じ作者である延寿の『唯心訣』一巻の跋であることが注目されるのである。

そして、文中には西菴可遂が明教臺で得た『唯心訣』を、孫城の祐上人なる者が元統二年（一三三四）に刊行する旨がのべられている。この年時は、『蔵乘法数』の序跋年記と一致している。ちなみに、この余闕が撰述した『唯心訣』の跋文は、筆者の知るかぎり現存する同書のいずれのテキストにもみられぬものであり、かつてこの書が元代に刊行されたことを示す貴重な資料とみられる。

このように、元の高官余闕は西菴と密接な関わりがあつたのである。『藏乘法数』の後序によれば、余闕は西菴から与えられた『景德伝燈錄』の“趙州転藏經畢”に参じていて、伝記からは未詳ながら、西菴に参禅していたのかもしれぬ。

では、その西菴とはいかなる禅者か。この人も僧伝の上には名を出していない。そこで、わずかに『蔵乘法数』の末尾にちかく付されている、前揚一覽の5原跋に注目しよう。

先師西菴和尚、久參中峯・無用諸尊宿、明華嚴・

円覺諸教之大旨。承

旨、住持淮西廬之明教臺、

長生御講開演之暇、重修蔵乘法數一卷。淮南

參政余闕、為之序印行。未久、寺遭兵燬、而板亦隨燼。予病斯文之泯滅、每求而未得。因南游閩中、偶獲取本。逐募衆緣、命工繡梓、以廣流通。復刊壽禪師心賦、附諸卷末。庶觀者、即一心而明

万法、了方法而得一心、心法双忘、即理事融通者矣。昔至正庚子春 古巢山人永如謹誌

右のように、駒大本では無刻であつた四行目の五文字は、「蔵乘法數一」であった。そして、この五文字によつて、全文の意味が明瞭となる。すなわち、撰者永如のいう要点は、「かつて先師の西菴和尚が重集した『蔵乘法數』一巻は余闕の序を付して刊行されたが、まもなく兵火で板木が焼失した。私は閩の地で同種の本を得、衆縁を募つて刊行するが、これに『心賦』を付刻する」というものである。

つまり、『蔵乘法數』の初刻本には『心賦』は含まれず、至正二〇年（一三六〇）に永如がそれを改版刊行するに際し

て、はじめて附刻されたのである。『心賦』だけの宋代刊行本は未詳であるから、筆者はこの附刻版をもつて前掲一覧表の①としたのである。ただし、至正版の『藏乘法数』も世に伝本はないようで、記録さえも知られていない。また、韓国には一三八九年の刊行とされる高麗版『藏乘法数』が二部現存しているが、初刻版からの重刊であるか至正本からの重刊であるかは、目下未詳である。前者ならば『心賦』が含まれず、後者ならばあるはずではあるが、未詳のために一覧表からは省いておいた。

つぎに、問題の西菴であるが、永如の刊語によれば西菴は先師であり、中峯や無用に参じた学僧で廬州の明教臺に住した学僧であったことが知られる。まず、中峯と無用はそれぞれ中峯明本（一二六三～一三二三）とその嗣孫の無用守貴（一二九〇～一三六一）であるならば、西菴は杭州近辺で修学した人である。のちに住した廬州明教臺は難解であるが、『続修廬州府志』卷一九によれば、合肥県の明教臺には唐代創建の古刹である明教寺があるから、あるいはこの寺に住持した人物ではないかと思われる。嗣承関係は未詳であるが、さきの余闕に公案を提示していることから、臨済宗に属する禅者であつたと考えられる。

概して禪籍の開板には、僧伝等に名の乗らぬ禅者の功績が多いのであるが、西菴・永如の師資の場合も同じである。地

味な仕事には、地味な人びとの努力が不可欠なこと、時代や国境をこえている。

大内版の末尾に付される6の木記刊語を書いた靈通なる禅者も、また同じ傾向にある。文は簡潔ながら西菴の序をふまえ、要を得ること、なかなかの禅者と思われる。大内氏ゆかりの禅寺住僧であったのだろうか。その調査は今後に期したいと思う。

さいごに、大内版『心賦』の文献的な価値についていえば、永如が附刻した至正一〇年（一三六〇）当時の文字を遺存しているからには、『心賦』単独の伝本としては現存最古のテキストを提供する点にある。これは、前述の高麗版『註心賦』（一三九七刊）が南宋初期の語句を遺存するのについで古い。しかも後に紹介するように、大内版には他本と異なる独特の文字が多く、その点からも資料的には注目すべきテキストといえるのである。

つぎに、大内版の覆刻本⑤についてふれておこう。本版についてては、川瀬一馬氏が寛永ごろに大内版そつくりの覆刻としていたが、のちには慶長頃刊と自説を改めている。⁽¹⁸⁾ 筆者は駒大本の正体を知るべき必要から、その写真版を持参し、大内版『藏乘法数』の正本と覆刻本とを所蔵する東洋文庫において、これら三本を相互に比較検討をした結果、興味あるこ

とが判明した。以下、正本と覆刻本、覆刻本と駒大本について、それぞれ書誌的に大差のある点を対照してみよう。

の刻字を遺したり、文体を不自然にした操作などは、学者の炯眼を愚弄した無眼子の遊戯としか評しようがない。

行 格	大 内 版	覆 刻 本
卷末木記	左右双边 「無板質」	四周双边 「無板贊」
文字体	筆勢鋭く勢あり、精刻で 迫力あり	丸みを帯び勢い弱し、平凡 で迫力を欠く
刊 語		

覆刻本（心賦の部分）	駒 大 本
丁数「四十三」「五十五」 アリ（第五十五丁）	ナシ（黒色） ナシ
アリ	アリ（四行目の五字ナシ、白色）
アリ（三行目の「藏乘法數」 が「藏□心賦」）	アリ（三行目の「藏乘法數」 が「藏□心賦」）

前節では、いわゆる大内版関係のテキストについての検討をおこなった。其の他の『心賦』の諸本としては、前掲の一覧表のように朝鮮本と明版、および永久本・御選本・心髓本の合計五本があげられる。前者二本は現存未詳で記録だけのもの、後者三本は現存テキストである。

まず③の朝鮮本であるが、これはかつて黒田亮氏が『朝鮮旧書考』の中で紹介されたもので、「刊記附刻朝鮮仏典目録」（昭和一五年五月一〇日作製）のうちに、つぎの著録がみえる。

八二 智覚禪師心賦

万曆元年癸酉秋下澣日山人義仁謹跋⁽²⁰⁾

右の対比により、もはや贅言は無用であろう。駒大本は覆刻本の『心賦』以後の部分から余闕の後序を省き、原跋と刊語中にある「藏乘法數」に関わる文字を削除または改変しさらに全体の丁数を消した。これで改造本はできあがった。だが、いつ、なんの目的で、どのようにして改造をしたのか。その詮索は小稿の範囲をこえる。ただ、版心に「法數」

関説記事などを知らない。義仁についても、目下のところ手がかり皆無である。したがつて、昭和一五年（一九四〇）の時点で半島に万曆元年（一五七三）跋刊の朝鮮本『心賦』が所在したという以上のことと言及できないのは、すこぶる遺憾である。

つぎに、④の明版については、明末の文筆家として名高い刑部尚書王世貞（一五二六～一五九〇）の文集中にみいだせる「心賦序」の存在によつて、あるいは当時刊行されたことが示唆されるため、あえてここに明版として掲げたものである。この一文は、『勅建淨慈寺志』卷二八にも引かれている⁽²²⁾が、世貞の文集の一つである『弇州山人續稿』二〇七卷中、

第四二巻に収録されるものをつぎに掲げておく。なお、『勅建淨慈寺志』所収テキストによつて、文字の相違を対校しておいた。

心賦序

心賦者何、永明禪師寿老所著也。梵語為質多耶、又為波茶。震丹語為心。仏之所謂覺、覺此而已、真心之外、皆妄心也。天竺古先生、說法四十九年、至竟無一法可說。未覺則万語不為多、覺則一字不為少。嗚呼、是何寿老之言之多也、夫亦為學人地也。当四十九年之說法、一法而諸經異名、諸學人者、尋名而徇之、則益遠矣。寿老之為此賦、欲使古先生之所說無法而非心、學人能覺此心

則無心而非法。其采聞若博、而為辭若詳、然以反說約耳。文而以韻者、何古先生之為教也。多以梵音作哀慈響、俾人從聞根而入道中。國之為學也、始托文学而傳焉。夫聞根之易於見根也、寿老蓋知之矣。故一切而攝之韻、俾聽者、精於入、而誦者、有味乎言之也。夫此賦伝、而學人指妄為真者、吾知免矣。其以識為覺者、則不能無隱憂云、天下求仏於仏、而馬祖示之曰、即心即仏。然又不免求仏於心、而祖復破之曰、非心非仏。夫非心非仏之教大行、而即心即仏者為真得也。嗚呼、悟此而後、可以讀寿老賦哉。苟悟此而、何所讀寿老賦哉。昔宣律師註楞嚴、使那咤入兜率印証之慈氏、而後成書。余無可印証者、證之心而已。
 1 托—託 2 而—為 3 蓋—益 4 「於」ノ下ニ「聞」アリ 5 7 曰
 一日 6 祖—ナシ

みるとおり、この文には刊行に関する言辞はみあたらない。知るとおり、序跋といつてもさまざまな種別があり、ましてや明代きつての文豪である世貞であるからには、かならずしも右文は刊行序ではないかもしない。しかし反面、刊行時の序跋であつても、刊行に関する言辞がまつたくないものも珍しくはない。こんな理由により、世貞のころに『心賦』の明版が刊行されたという記録もみいだされぬまま、あえて一分の可能性からとりあげたしだいである。

なお、この王世貞の「心賦序」は、やがて万曆三四年（一六〇六）に成った『永明道蹟』に抄文が引用され、そこから

さらに採録されてわが寛文本『註心賦』の巻頭をかざるなど、のちの文献への影響は少なくない。こうした事柄については、小稿の第五節でのべる。

⑥の永久本というのは、駒澤大学図書館の永久文庫に所蔵される筆写本一冊である。筆写本でありながらあえてここにくわえた理由は、『心賦』だけの筆写本は非常に珍しく、筆写時期が近世初期頃とみられること、および、本書が完全な詠賦の体裁に書かれていること、などによる。

本書は、半葉一二行一八字詰に淨書され、訓点と送りがながつけられている。識語も旧蔵印もなく、永久俊雄氏以前の伝承経路はまつたく未詳であるが、文字は端正ながら図太く大らかである。料紙の古さや文字の味わい、訓点や送りがなのつけ方などから推して、おそらくは近世初期を下らない時期の書写とみてよいであろう。

本書の巻頭には、「重刻永明禪師心賦引」として、寛文三年（一六六三）の年記をもつ連山交易の序文をおき、以下、内題を「永明延寿智覚禪師心賦」として本文が書写され、尾題「永明寿禪師心賦終」でおわる。前述のように、本文は詠賦のスタイルをもつて書かれ、対句を揃え文字の上げ下げをほどこし、ここに巧みな旋律が再現されて、あたかも原賦が生き生きと詠ぜられるかの感を抱かしめるほどである。ほかに

『心賦』だけがこのような形式で版刻されたテキストは皆無であるだけに、本書はさながら著者延寿が書いたはずの原著の形態を髣髴とさせるものがある。惜しむらくは、たれの筆写かはわからない。

問題は、さきの序文である。じつはこの序文は、『註心賦』が本邦ではじめて刊行された際に、連山が某禅人の請めで訓点を付したことなどをのべた一文であり、「重刻註心賦引」が正式な序題であった。この序については、小稿第五節でくわしく紹介するが、いまはこの永久本にこの序が書写されている意味についてだけを考えておこう。

まず、本書の筆写が寛文三年以後であるのはいうまでもない。本書の筆写子は本邦初刻の『註心賦』を閲読し、その親部にあたる『心賦』だけの再現を試みたのである。筆写子はおそらく詩賦に長じた、または愛好する禅者であった。淨書した本文の首部には、あえて題名まで変えて連山の序を付した理由は難解であるが、たんなる飾りというよりは、あるいは刊行を意図したのかもしれない。本写本の序も本文も、文字には木版独特の飾り文字が多い。その意図はともかく、本書の存在は、今日としては貴重な伝本というべきであろう。

つぎは⑦の御選本である。龍藏所収の『御選語録』の中の

テキストであるが、竜蔵には別に『註心賦』四巻も収録しているので、両者を区別して、『心賦』を御選本、『註心賦』を竜蔵本と仮称する。竜蔵は、全蔵の末尾にちかい「林」字函（第七一七号）から「即」字函（第七二〇号）の四函に、『御選語錄』四〇巻を收める。その「林」の第一〇帖目が『心賦』一帖である。

『御選語錄』は、清の世宗雍正帝がみずから選集して序を付し、雍正一一年（一七三三）に成立した。ところが、のちの同治六年（一八六七）の南岳福嚴寺刊行本や光緒四年（一八七八）の金陵刻経処刊行本はいずれも一九巻から成り、ここには『心賦』は含まれていない。これに対して、竜蔵収録書は全四〇巻と浩瀚であつて、その巻八には『心賦』が入っている⁽²³⁾のである。なぜ、流布本にはないのであらうか。

これは四〇巻本と一九巻本の両者を総合的に考察すべき問題であるが、いま『心賦』の扱いのみから判断すると、御選本の「妙円正修智覚永明寿禪師集」に寄せられた雍正一年の御製序⁽²⁴⁾をみると、そこには『宗鏡錄』などと並んで『心賦』の名がみえる。したがつて、竜蔵本の『御選語錄』四〇巻が本来のすがたであり、流布本一九巻はその抄録本ではないかと思われる。ちなみに正統藏經への入蔵本『御選語錄』は、さらに一九巻を大巾に抄録したものであり、本来のテキストから遠いことはなはだしい。

ともあれ、御選本は『心賦』のみとしては唯一無二の入蔵テキストであり、その意味では権威のある禅籍といえる。この御選本が底本としたものについては、第六節で考察する。

さいごの⑧心髓本とは、清末の恒贊達如が編集した『仏祖心髓』一〇巻のうち、第六巻末尾に収録されている『心賦』を指す。『仏祖心髓』は光緒一三年（一八八七）に刊行されたものが、唯一の通行本のようである。

このテキストは、内題のつぎの行に示す撰者名を「杭州永明寺主智覺禪師延壽撰」とし、本文には句読点「。」を付している。本文の字句は嘉興蔵所収本『註心賦』の「心賦」部分のそれとほとんど同一である。

以上、『心賦』の諸本について考察してきたが、単独に刊行されたテキストは皆無であり、永久本は別として、現存本はいずれも合刻であつた。これは、『註心賦』四巻が各時代に刊行され、比較的流布したからである。したがつて、『心賦』本文の伝本系統についても、『註心賦』の「心賦」部分からの貸借関係を考慮しなければなぬことはいうまでもない。この問題については、小稿のさいごにゆづりたい。

四 高麗版『註心賦』

高麗大学所蔵の古版『註心賦』四巻は、洪武丁丑(1310年・1319七)の刊語をもつテキストである。といふが、高麗国は一三九一年に終熄し、翌年から朝鮮国は李朝の治世となる。したがって、右の古版は李朝五年目の刊行であるから、敵密には朝鮮版というべきかもしれない。しかし、"高麗版"の呼称を高麗国終熄までに限定するという定義もないようであるから、筆者は便宜的に一四世紀中の刊行書は"高麗版"と呼んでいる。当該の『註心賦』を高麗版として扱うのは、個人的な理由からである。

また、『註心賦』の書名を"心賦註(注)"と呼称するテキストがある。(11)のわが正統蔵本がそれであり、古くは明末の『澹生堂藏書目』にも同じ著録がみられる。⁽²⁵⁾しかし、続蔵本の祖本とみられる嘉興蔵本は"註心賦"であるから、続蔵本の呼称は編者による改名とみられる。古書目の著録については難解であるが、ここでは現存最古の宋・元版や高麗版をはじめ、他のほとんどのテキストに共通する"註心賦"をもつて統一的な呼称とする。

(5)の高麗版『註心賦』については、これまでにくわしい紹介はなされていないようなので、複写物件という限定条件のものではあるが、判明する書誌的特徴を以下に記載してみよ

卷冊	四巻1冊
装訂	線装袋綴
匡郭	四周单辺と左右双辺が混在(17.4~19.2cm)×
行格	毎半葉八行、毎行111~16字。注文双行11
版心	白口、黒魚尾(上部のみ)「心賦(巻数)(丁数)」
書込	あり(天部欄外に校注)
付点	あり
旧蔵印	「普□専門学校図書館」、他に二種あるも解読未
序跋	あり(別記)
原刊語	あり(別記)
刊語	あり(別記)

以上のほか、摺刷は比較的良好であり、補刻はないようである。ただし、第一冊には二〇数か所、第二冊には三〇数か所のそれぞれ無刻の部分がみられる。こうした箇所は最上部や最下部、またはとじしろや版心の近くに特に多い。こうした特徴は、この高麗版の底本テキストにすでに破損があり、高麗版は破損によって解読不能な箇所を他本によって補うゝとなく、底本に忠実に版刻していることを示唆するものであ

る。なお、匡郭が一定していないが、これは朝鮮開版の典籍にはごくふつうの特色であつて、異版や補刻を知る手がかりにはならない。また、内題・尾題・撰者の肩書きなどは各巻に統一を欠く。こうした不統一さはしばしば古版に特有な素朴さであって、かえつて古型の遺存を思わしめる。

つぎに、本版全体の構成内容を順序にしたがつて記載するところ、つぎのとおりである。

〔第一冊〕

- 1 寿禪師心賦序 開寶三年、錢惟治撰
- 2 本文（卷一・卷二）
- 3 〔第二冊〕
- 4 原刻記 紹興三〇年、李度記
- 5 本文（卷四）
- 6 心賦釈音
- 7 原刊記 紹興三〇年
- 8 原刊語 紹興三〇年、行洪題
- 9 刊語 洪武三〇年、無学自超題

*¹ 寿禪師心賦序

壽禪師心賦の序

寧遠軍節度使の錢惟治が序す
 粵に戒定慧は、強いて名づくれば三つを務むべきの学にして、
 袩道儒は、一に帰するの理を總べ撰む。達せざらば則ち壁立万刃にして、或た悟らば則ち洞門一開せん。故に一宿あらば通じ、故に累劫あらば惑う。飯色に二なしと雖も、乃ろ相に差あるを覗ん。生民ありて以来、達士なきに非ざるも、能く道鍵を恢弘め、法門の領袖たる者は、師に非ずして誰そ。新著の『心賦』は、玄 枝を撮え尽し、乃ち一心を指引ること坦然明白なり。予に小序を命ずるに因つて、抽毫を得るも、所謂る燭火を持して天光を引くがごときのみ。

庚午の歲（九七〇）四月八日、爾か云う。

*² 寧遠軍節度使錢 惟治 序

*³ 粵戒定慧、強名務三之學、 袪道儒、惣攝歸一之理。不達則壁立万刃、或悟則洞門一開、故有一宿而通、故有累劫而惑。雖飯色無

右のとおりであるが、これを一見しただけでも、いかに本版が宋代の原刻記事を豊富にとどめる貴重テキストであるかが察しられるであろう。

まず1の錢惟治が撰述した序文は、半葉七行一一字の大文

字で印刻され、この高麗版『註心賦』のほかには、いずれの『心賦』と『註心賦』のテキストにも收められていない、きわめて珍しい一文である。ただし、光緒一四年（一八八八）刊行の『勅建淨慈寺志』卷二八の巻頭にこれが収録されてはいるが、なぜか高麗版とは若干の文字を異にしている。

以下、高麗版による訓読文と、その原文を『淨慈寺志』所収文により対校して掲げよう。

二、乃覩相有差。生民以来、非無達士、能恢弘道鍵、領袖法門者、非師而誰。新著心賦、撮尽玄摠、乃指引一心、坦然明白。命予小序、因得抽豪、所謂持燭火、而引天光耳。庚午歲四月八日、云爾。

1コノ題名五字ナシ 2コノ一行一〇字ナシ 3懃一總 4門一開一開
一門 5飯□ 6弘一宏 7撮一撮 8摠一樞 9以下ノ一行九字ナシ

右のようすに、文は短編ではあるが、きまじめでやや硬い感じを受ける。それもそのはず、この一文をものした錢惟治なる人は、ときにいまだ二二歳の青年であつた。

錢惟治（九四九—一〇一四）は錢塘（杭州）の人。吳越國の忠遜王弘倧の長子で忠懿王弘俶の養子となる。乾德四年（九六六）、一八歳で寧遠軍節度使に任じ、太宗の時に檢校太尉に進む。惟治は書に長じ、書帖や万余巻の図書を所蔵し、また詩集一〇巻があつた。⁽²⁸⁾しかし、この詩集はおろか文章もほとんど伝存しないようで、現在、巴蜀出版社から刊行中の「全宋文」中にも、かれの文はまったく収録されていない。

いittai、吳越の錢氏一族は、五代から宋初にかけて崇仏の念きわめて高く、特に禪門に深い帰依を寄せた。そのため当時は杭州を中心として、法眼宗が大いに隆盛をほこつてゐる。⁽²⁹⁾法眼宗第三世の延寿についても、はじめ明州雪竇山に住していたが、錢弘俶が九六〇年に靈隱寺（杭州）を創建して第一祖に迎え、翌年に永明寺（同南屏山）に移つた。⁽³⁰⁾この寺もか

つて弘俶の建てた寺であり、ここ宗鏡堂で延寿は王の請めにより『宗鏡錄』百巻を著している。時に建隆二年（九六一）であつた。⁽³¹⁾

こうしてみると、錢惟治が延寿の新著『心賦』に序文を書いたのも、おそらくはこうした錢氏と延寿の深い関係あってのことであつた。この序文は内容からみて、さきに弘俶が『宗鏡錄』に付した序文を前提としている。これら大小の両著に対する老若父子の両序は、けつして偶然ではなかつた。のみならず、宋初の禪錄に付された序文としては最古層に属し、のちに統々として宋代禪錄に登場する高官知識による序跋の先駆をなすものとして注目すべきである。⁽³²⁾

ともあれ、当面の『心賦』一巻は、序が撰述された開寶三年（九七〇）四月の直前に成立したことは明らかである。しかし、『宗鏡錄』と同様、付序の年月と時を同じくして印刻に付されたのではないであろう。惟治の序にも開版についての言辞はなく、また、それをいう他の客観的資料もみあたらぬ。當時、まだ仏典の単行書はほとんど知られていないし、勅版大藏經も開雕直前の状況であった。惟治のいうとおり付序は延寿からの要請であり、それは前著と並んで権威のお墨付であつたのだろう。

『心賦』の成ったとき、すでに延寿は七二才、その五年後

に対する経論祖語による裏づけを急いだのではなかつたか。

それは自撰の作品に対する註釈であるとともに、教禪一致の根拠表明でもあつた。『註心賦』四巻は、文字どおり博引傍証あますところがなく、前著の『宗鏡錄』さえも引用している。ついでにいえば、『宗鏡錄』に引かれる禪の古資料は近年来学者の注目するところであるが、『註心賦』に注意する者を知らぬ。ところが、ここには同様に多くの禪錄古資料が引かれ、今後の研究に大いに資するのである。

それでは、『註心賦』の初刻はいつであつたのだろうか。明確は欠くが、次に紹介する南宋初期の紹興刊本が重開としているところから、北宋期であつたことはまちがいない。あえていえば、『宗鏡錄』の初刻が元豐年間（一〇七八—一〇八五）であるから、『註心賦』もその後まもないころと推定される。延寿の寂後一世紀以上を経ての初刻となつた理由は、開板事情もさることながら、錢氏一族の没落と法眼宗の衰退という延寿の個人的背景にもとづく変化、と考えてよいであろう。

さてつぎに、高麗版『註心賦』に刻記されている原刊記二つに注目しよう。これが前掲の構成内容の4と7である。4は巻三の巻末に一行、7は巻四末尾におかれる6釈音のつぎに黒魚尾を伴つて三行が、それぞれ刻記されている。これをつぎに掲げる。

今將古本逐一校證並無差誤重開印行
紹興三十年歲次庚辰仲夏円日開畢
錢塘鮑 淵書 李度雕

（卷三末）
（卷四末、釈音の次）

右は紹興三〇年（一一六〇）に『註心賦』が重開、すなわち再版された南宋版のときの原刊記の遺存である。これによつて、高麗版は②とした紹興三〇年刊行本を原本としていること、その紹興刊本も古本に忠実な再版であつたことなどが知られる。なお、版下筆写子の鮑渾は未詳であるが、刻工の李度については『漢書』の南宋前期両淮江東轉運司刊三史本といわれる宋版の現存本にみられる刻工名に等しい。³⁴時代と地域の一一致により、あるいは同一人ではないかと思われる。

この紹興刊本については、高麗版にはひきつづいて行撰なる者の刊語と、勸縁や開版責任者たちの列名を最大もらざず一紙一八行に付刻している。これが前掲構成の8であり、以下刻記形式どおりに掲げてみよう。

臨安府北閔接待妙行院比丘 行洪 謹募
士庶 諸山禪講衆力重開 智覺壽禪師註心
賦一部四冊蒙 圓覺都僧錄施財成就開第四
冊所貴流通正教利益人天仰冀

山門知事

行速

住持沙門

行全

勸縁同開宝藏論慶恩院住持沙門
塩官壽聖禪院住持嗣祖沙門

惠初

前住持精進教院伝賢首宗教沙門

了然同校勘

勸縁寶藏院住持伝南山祖教慧覺大師

義彬

勸縁千頃広化院管内都僧正慧覺總持大師

善彬

勸縁上天竺靈感觀音院住持伝天台教觀沙門

若訥

勸縁淨慈光孝禪寺住持嗣祖仏智大師

道容

勸縁靈隱景德禪寺住持嗣祖沙門

道昌

住持天竺時思薦福寺伝天台教觀慈授法燈大師

子琳

都勸縁左街僧錄主管教門公事住持圓覺報恩崇福院

思彥

妙慧辯才大師

思彥

みるとおり、この刊語と列名は、『註心賦』の②紹興刊本がいかに大がかりに開版されたかを知るべき貴重な資料である。すなわち、本版は妙行院行拱の募縁により、土庶や諸山の禅講、つまり諸方の禅寺講寺の衆力によつて成就したのであつた。関係責任者たちの列名は、あたかも藏經の訳場列位にも似たものしく、校勘者も勸縁者もなんと多彩な各宗各派におよんでいることか。

いま、彼らに冠せられる寺院名の所在を『咸淳臨安志』によって順にさぐると、接待妙行院は太湖南の湖州、慶恩院は臨安、壽聖禪院は錢塘江北の塩官、精進教院以下の諸寺は最

後の崇福院が未詳であるのを除き、いずれも臨安である。とりわけ、五代に吳越王錢氏との関わりの深い寺院が多く、また上下の天竺寺、淨慈・靈隱両禅寺などの名刹がみられ、両禅寺は延寿ゆかりの寺であることも注目される。さらに人物としては、大師号をもつ者五名、善琳・慧光若訥・道容・月堂道昌のよう後に後世名をのこす人々も含まれている。⁽³⁵⁾

募縁者行拱については、惜しむらくは未詳であつて、あるいは教家人であるかもしれない。しかし、右のような関わりをみると、行拱は臨安を中心として延寿と縁の深い寺々や人々に呼びかけ、開版を成就したのである。したがつて、ここにみられる列名者の超宗派的な多彩さは、すでに入藏といふ權威をもつ『宗鏡録』の著者であり、宗派をこえた延寿の仏法の広さを、まさしく反映するものといえる。

高麗版のさいごは、無学自超による刊語⁹が以下の六行に刻記されている。

得此本今二十余年矣恨無此方鋟梓伝

遠所期

主上万歳

世子千秋無邊含識知心是仏時洪武丁

丑秋七月日朝鮮國

王師妙嚴尊者 無學 題

この刊語により、本高麗版は洪武丁丑(三〇年・一三九七)七月に無學が半島ではじめて『註心賦』を刊行したテキスト

である。無学は李朝の建国創業に功績あつたところから、王師大曹渙宗師禪教都摠撰伝仏心印弁智無碍扶宗樹教弘利普濟都大禪師妙嚴尊者という、たいへんな尊号を受けた無学自超（一三二七～一四〇五）その人であり、懶翁慧勤の法嗣である。⁽³⁶⁾ 禪籍の開版については、本版のほかに洪武二八年（一三九五）に『人天眼目』三卷を上梓していることが知られ、斯方面にも尽力した高僧であつた。

以上のように、高麗版『註心賦』四巻は原本の紹興三〇年刊本に忠実な覆宋版の完本であり、紹興本の形態をまのあたりに伝えるテキストとして、きわめて重要な資料価値をもつものである。この点、北京図書館に現存する紹興刊本が端本である短所を補うに充分である。

この北京図書館本については、『北京図書館古籍善本書目』子部に、つぎの記載がある。

註心賦四巻宋紹興三十年積行拱等刻本
宋紹興三十年延壽撰
宋紹興三十年
實錄合冊
八行十四字或十五字
双行二十一字
白口
左右双边
存一卷四⁽³⁸⁾

右によれば、書誌的な特徴は高麗版のそれにほぼ同じであるが、『註心賦』は巻四の零本だけであつて、それも『永明智覺禪師方丈實錄』なる斯界未知の一書と合冊されているようである。この一書については、同目録の別の箇所に、

永明智覺禪師方丈實錄一巻宋紹興元年
元照撰
宋刻本
与註心賦合
一冊
九行十七字
白口
左右双边⁽³⁹⁾

と著録され、元照の選述とされる。

元照とは北宋期に臨安を中心に南山律を鼓舞した芝園寺元照律師（一〇四八～一一六）であろうが、その現存する多くの著述中に右の書名はみあたらぬ。⁽⁴⁰⁾ 『永明智覺禪師方丈實錄』とは、書名から推せば延寿の伝記かと思われるだけに、これが世に紹介されることを鶴首したい。ともあれ、北京本は延寿関係の書物ということから、『註心賦』の零本と本書が合冊で伝えられたのであろう。

ここで注目すべきことは、北京本がまだ合冊されていない時期に記述されたとみられる解題がある。それは一〇世紀初頭ごろに王文進が古書を博覧見聞して記録した『文祿堂訪書記』であつて、その中に『註心賦』の宋版と元版に対するつぎの著録がみいだされるのである。

（マヤ）
註心賦 四巻

宋紹興延壽述。宋紹興刻本。附音釈。存四巻。半葉八行、行十五字。注、双行二十一字。白口。卷末刊、今將古本逐一校証並無差誤重開印行。紹興三十年歲次庚辰仲夏円日開畢。錢塘鮑洵書

李度雕、三行。宋譯、玄境字欠筆。

又、元刻本。半葉九行、行十六字。注、双行二十一字。黒口。板心上記字数。錢惟治序。

有覺慧觀如道人、又玄齋攷藏、安樂堂藏書記、明善堂珍藏書画記、東郡楊紹和字彥合藏書、東郡宋存書室珍藏、各印⁽⁴¹⁾。

右に著録される宋版は、王文進がどこで見たのかは明示されぬ。しかし、現北京図書館本とまったく同じ巻四だけの紹興刊本が、近代初期の時点ではかにも遺存していたことを、いつたい想像できるであろうか。まず、これは同一本とみてまちがいないであろう。とすれば、右の解題は北京本のそれを補うことになる。すなわち、当該の紹興刊本には巻末に音釈や行挿の刊語があることが知られるが、これらの特徴はさきの高麗版のそれと、みごとに一致する。こうした事実は、高麗版が覆紹興版であるという立証を補強するものである。

つぎに右の『文禄堂訪書記』が著録する元刻本について注意したい。これもどこの所在かは不明であるが、錢惟治の序と多くの旧蔵印をもつ一本であった。じつは、同じ元刻本とされるテキストが北京図書館に所蔵されているのである。すなわち、同図書館の善本目録には、つぎの著録がみえる。

註心賦四卷宋紹延寿撰
四字或十五字
小字双行
周叔弢跋二冊九行十
字細黑口左右双辺 (42)

右の著録と『文禄堂訪書記』のそれとを比較すると、匡郭・行格・版心などの点ではほぼ一致し、両者ともに年記をいわぬ元刻本とするのも同じである。しかし、北京本が周叔弢(未詳)の跋をもつ二冊本という記載と、文禄堂本が錢惟治の序や多くの旧蔵印をもつという記載とは相互に比較不能の特徴であるから、これをもつて両者の同異を論することはでき

ない。

しかしながら、さきにみたように宋版に関しては、文禄堂の著録本は現北京図書館の所蔵本であった。すると、これと並んで著録される元版も、やはり同一機関の所蔵本と推定するのは自然であろう。元版について記録する他の客観的な文献は、目下のところみいだされない。⁽⁴³⁾こうした諸点からみて、筆者は文禄堂の著録対象テキストと現北京図書館蔵本とは同じ元版であるのみならず、これらが同一本である可能性が高いと推定するものである。前掲の諸本一覧で③元版としたものが、これにほかならない。

五 『註心賦』の諸版

『註心賦』の古版については、これまでに紹介や考察をしたように、北宋版・南宋版・元版・高麗版という各時代ごとの古版類が存在した。ところが一方、日本ではなぜか本書は永らく開版がなされなかつたようで、五山版は遺品も刊行記録もみいだされていない。そこで前記古版類につづく現存テキストとしては、明末の嘉興蔵本の登場ということになる。

明代初期にあいついて開版された南蔵・北蔵の大蔵経の中に『註心賦』の入蔵はなく、はじめての入蔵が嘉興蔵本であった。嘉興蔵本は後代のテキストにも大きな影響を与えているから、その文献史的な地位はすこぶる重要なことである。

⑥の嘉興蔵本は、嘉興蔵の本蔵部分ではなく、いわゆる統蔵部分への入蔵であった。嘉興蔵全体の目録である『蔵版経直画一目録』によると、その第四二函に八種の仏典が収められる中に、「永明心賦註一本」の著録がみられる。⁽⁴⁴⁾しかし、現物（駒大蔵本）は四巻一冊本で、内題・外題ともに「註心賦」で統一されている。したがって、目録の書名は、編者による編集名なのである。

嘉興蔵本のテキストは、全体的につぎのような構成となつていている。

1 本文（巻一）

2 刊記 崇禎元年三月

3 本文（巻二）

4 刊記 崇禎七年五月

5 本文（巻三）

6 刊記 崇禎七年七月

7 本文（巻四）

8 原刊語 洪武二年、妙叶書

9 音釈

10 刊記 崇禎七年三月

これによつても知られるように、本版は卷一だけが崇禎元年（一六二八）に刊行されたものの、残る三巻が上梓されたのは満六年後の崇禎七年（一六三四）のことであつた。各巻末の

刊記にみえる施財者はいずれも「丹陽居士賀焜」であるが、全四巻がスムースに発刊されなかつたのは何らかの事情があつたことを思ひしめる。ともあれ、以下に巻四の巻末刊記だけを引いておこう。

丹陽居士賀焜施賀刻此

註心賦卷第四

双親冥福得悟仏乘一切有情共証菩提

計字二万零九百四十五箇 該銀拾両零

四錢七分五厘 姑蘇比丘契機對

崇禎七年春三月徑山化城寺識⁽⁴⁵⁾

つぎに、この嘉興蔵本の原本が何であるかを知らしめる資料として重要なのが、8の妙叶による原刊語の刻記である。

これはかなり長文であるから、句読点を付してつぎに揚げよう。

宋杭州慧日永明寺智覺禪師心賦、集諸經語、以自註釈。迺實際理地一味、清淨心地法門、貫一大藏之要旨、別三乘賢聖之器根。弘諸部之大綱、聞單伝之的旨、會諸異解一道、而起証諸仏之心、了衆生之妄、點衆生之妄。即諸仏之心、實不可思議、無礙解說、最勝法門也。昔既盛行、近將堙沒。特發鄙志、謹募衆緣、命工繡梓。冀垂之於不朽。仰願、諸仏大慈、加被俾此法門、普遍三世十方、盡虛空界、微塵刹土、一切衆生、依正色心、法界普薰、平等解脱、究竟成就。

一雨普濡使三根而並茂、八音遠被令九界以齊帰。

肯洪武十一年戊午歲二月 観音誕前四日戊午

此丘 妙叶 焚香稽首拝書⁽⁴⁶⁾

右文のように、この刊語は妙叶が洪武二年（一三七八）に『註心賦』を刊行した際の一文であつて、④の洪武本に付刻されたあつたものを、嘉興蔵本がそのまま刻記したのである。書誌の上から重要なのは、妙叶が本書は「むかしから既に盛行してきたが、近ごろは堙没しようとしている」ので、「衆縁を募つて刊行する」といつていることである。なるほど、南宋初期の紹興三十一年版からは二百年以上、元版からも百年あまりも経過して、該書はすでに伝本が稀少となつていてものと思われる。したがつて、妙叶の仕事は時期をえたのであるが、いったいこの人はどこのいかなる人であつたのだろうか。

妙叶は、明代以後の僧伝の類にはまつたくみあたらない。ところがわれわれは、かの大珠慧海撰『頓悟入道要門論』の編者として、妙叶の名を知つていてる。『頓悟要門』に付せられる「妙叶由來書」によれば、かれは洪武二年（一三六九）に大珠の語録古書を発見し、これに他本による大珠の語を加えて上下二巻とし、全体を『頓悟要門』と名づけたのである。そして、現行の『頓悟要門』のテキストには、卷頭に阿育王山崇裕が書いた洪武六年（一三七三）の序文があり、その中で

妙叶について、「妙叶維那は四明翠山の大中理公の神足なり⁽⁴⁸⁾」云々の言辞がみられるのが注目される。

妙叶という特異な名と時代的一致によつて、『註心賦』の刊行者と『頓悟要門』の編集者はおそらく同一人とみてまちがないであろう。かつて宇井伯寿氏は岩波文庫本の『頓悟要門』を刊行するにあたり、妙叶について調べ、解題でつぎのように記述されている。

又、妙叶についても知り得る所が少ない。崇裕の序によつて、纔に四明の翠山の大中理の弟子であり、四明の会下に維那となつて居た人なることが知られるのみである。然し妙叶の集めたものに宝王三昧念佛直指上下二巻があつて、伝はつて居る。洪武乙亥（二十八年、一三九五）に出来たと思はるが、念佛と禪との一致を述べたもので、妙叶は天台宗の人であろう。四明鄞江沙門とあるから、主として四明に居たのであらう。⁽⁴⁹⁾

また、筑摩書房の△禪の語録▽六『頓悟要門』の解説でも、著者の平野宗淨氏は、妙叶については右の宇井氏の解題以上のこととは不明としている。⁽⁵⁰⁾つまり、両氏ともに、『註心賦』の嘉興蔵本系統のテキストにみられるその名については注意されていないようである。それはともかく、宇井氏の指摘する『宝王三昧念佛直指』二巻は大正藏經第四七巻に收められているが、智旭の序文中に、

爰有妙叶導師、法紹宗乘、教興蓮社。⁽⁵¹⁾

とみえ、妙叶は禪と念佛の両門にすぐれていた人であることがわかる。そしてまた、妙叶の師である大中理については、南京天界寺孚中懷信の法嗣であることが判明したのである。すなわち、宋濂が撰した「大天界寺住持孚中禪師信公塔銘⁵²」には、孚中からの伝法の上首として名を列する一九名の中に「翠山志理」の名がみいだされる。また、『四明翠山禪寺志略』卷三の「先覺」の項には、志理に関するつぎの記事がみられるのである。

志理禪師

師無錄、可稽攷世譜中。嗣法於孚中信禪師。南岳下二十四世。⁵³

以上の考察により、妙叶なる人は、孚中懷信—大中志理—妙叶と法系を次第する禪者であることは明らかであろう。孚中は臨濟宗の松源派五世の人であるから、妙叶は同六世であり、南岳下第二五世に相当する。この人が、翠山住持のもので維那をつとめるかたわら、『註心賦』の刊力に尽力したのである。

この想像に難くない。

翠山とは、浙江省鄞県西南にある四明山の一峰、翠巖山のことである。ここに寺が建てられたのは唐代であるが、宋代からは大いに隆昌し、大中祥符元年（一〇〇八）には宝積禪院の名を賜り、嘉定四年（一二一）には張孝伯の奏聞により功德寺とされ、移忠資福禪寺の勅額を賜っている。『四明翠山禪寺志略』卷三によれば、宋元代には聞庵嗣宗・笑翁妙堪・大

川普濟・無文道燦などの錚々たる禪者が住した禪寺であった。しかし、いま当面の妙叶による『註心賦』刊行との関わりで注目されるのは、この禪刹と著者延寿との密接な関係である。

すなわち、『宋高僧傳』卷二八や『景德伝燈錄』卷二六の延寿伝によれば、延寿は二八歳のときに華亭鎮將の要職にあつたが、仏道への志募強く、遂に翠巖山の永明大師令參を礼して出家したのである。令參は雪峯義存の法嗣であつた。延寿はのちに天台德韶の法嗣となつているが、廣順二年（九五二）には同じ四明山中の雪竇山に開堂してから建隆元年（九六〇）に王弘倣によつて杭州永明寺に迎えられるまでの九年間は、明州にあつて学侶を臻湊させている。この間、直接間接を問わず、翠巖山ともさまざまな交流があつたであろうことは想像に難くない。

このように、四明や翠巖山はもともと延寿と親しい関係にあつた。くわえて、翠巖山では洪武六年（一三七三）に法華經を刊行しているから、その五年の間に『註心賦』を上梓するには好都合な条件が整つていたはずである。惜しむらくは洪武一年刊行の明版は伝存していない。しかし、妙叶による募縁に応えた人々は、おそらくは禪者のみではなく、諸山の多彩な顔ぶれであったものと思われる。

ともあれ④の洪武一年刊本については、他に闡説するも

のが知られていない。したがつて、そのテキスについては、

嘉興藏本によつて類推するほかはないのであるが、嘉興藏本が洪武本をまったく改変していいかどうかは安易に判断できぬ。たとえば、錢惟治の序文はどのテキストから省かれたのであらうか。いまは、この貴重な原序が嘉興藏本以後の諸本には消えてしまつてゐることを指摘するにとどめる。

ついでながら、ここに妙叶や翠山についてややくわしく考察したのは、妙叶がただ『註心賦』の刊行者のみならず、『頓悟要門』の編集者として禪録の伝世に重要な役割を果した人だからであり、また、それら淨業遂行の背景となつた寺についての理解も必須だからである。仏典の編集や刊行には深い因縁がひそんでいることを、はからずも教えられる一例であらう。

村上勘兵衛刊行

このように、本版は寛文三年（一六六三）に京都から刊行された町版であり、それは嘉興藏本の発刊から三〇年目のことであつた。

また卷首の二序とは、連山交易の「重刻注心賦引」と王世貞の「永明心賦序」であり、ともに半葉六行の大きな行書体で刻記されている。ただし、王世貞のものは元来『心賦』に付せられた序文からの抄文にすぎないことは、すでに第三節でのべたとおりである。その全文は同節で紹介したので、ここでは重複を避ける。

連山交易の序は、この寛文本の性格を知るための重要な内容を含んでいる。以下にその全文を掲げよう。なお、この序文と同じものが、『心賦』の⑥永久本の巻首に「重刻永明禪師心賦引」の題名のもとに筆写されていることについても、すでにさきの第三節で紹介した。

重刻注心賦引

永明智覺禪師、嘗拋大乘經一百二十本、諸祖語一百二十本、賢聖集六十本、都三百本之微言、總一仏乘之真訓、集心鏡錄一百卷。序文を置き、巻末下部につきの木記二行を刻していることである。

寛文三年孟冬日

『心賦』と『註心賦』の諸本と系統（椎名）

諸、以本撰末者也。然則心鏡横呑三百本之粹、心賦円舒一百卷之奇、豈非為般若之玄枢、作菩提之要路哉。且又要幼学之易曉、自注妙語之難思。遂使三草二本、咸歸一地之榮、邪種焦芽、同霑一雨之潤。蓋謂、自非阿弥陀仏之垂化、於五濁惡世者、其敦能與於此哉。粵有

禪人特發弘願、將刻棗板、憂慮若無和訓、童蒙難看。而以是請余則開卷檢焉。其為學海義天、匪如余之陋聞淺識者所可得、而管窺蠡酌也。雖然、若有因加点之力、而為弘教之助者、余之所願也。是以不敢辭之、隨檢隨点、云尔。

旨寛文壬寅冬 曹洞陳人交易題

右の序文の撰者である連山交易（一六三五、一六九四）は水戸の人で、近世初期においての曹洞宗きつての碩学であり、相模の大雄山最乗寺や関三か寺の一である下野大中寺（太平町）にも住している。經典や中国撰述の禪籍に対する注釈書や訓点はすこぶる多いが、連山の詩文集である『帰藏稿』や『帰藏采逸集』の中に、右の序文は収録されていない。

連山が序文を書いた寛文三年といえば、かれは郷土常陸の蒼龍寺（那珂町）住持で二九歳の若さであった。しかし、すでに常陸では楞嚴や碧巖を講じており、その英名は高かつたものと思われる。

序文中で書誌的に注意すべき言辞は、某禅人が『註心賦』の刊行を発願したが、従来は和訓がないので連山に依頼し、連山がこれを受けて加点をほどこした、という内容である。

某禅人は未詳であるが、該書の重みを知るかなりの学僧であり、連山はこれに応えて蒼龍寺でこの仕事を成就したのである。ともあれ、本版の刊行によつて、『註心賦』は本邦ではじめて親しい禪籍となつたのである。

このように、連山の序は寛文本初刻の際に書かれたものであるが、これにつづいておかれの王世貞の「永明心賦序」の抄文は、いつたいいかなる意味をもつのであらうか。

第三節でのべたように、この王世貞の「永明心賦序」の全文は、『弇州山人續稿』や『勅建淨慈寺志』に収録されているのであるが、寛文本に収録される抄文とまったく同じ七九文字が、じつは『永明道蹟』の中に「元美王世貞心賦序云」として引かれているのである。結論からいえば、寛文本はこの『永明道蹟』から採録したのである。

『永明道蹟』一巻は、明末の慈淨寺大壑が延寿の行状を三二条にまとめて贊を付し、万曆三四年（一六〇六）に成った一書である。万曆本は伝本が知られず、わが明曆元年（一六五五）に京都中野是誰から刊行されたテキストは、合計三三葉の精刻画を伴つた珍しい絵入本である。続蔵にも収録されが、続蔵本では絵を省くなどの改変がほどこされている。

ともあれ、当面の『註心賦』寛文本は、まだ世に行われて採録したとみてまちがいあるまい。當時、本邦では『心賦』

や『註心賦』の古い序文は他に需められえなかつた。しかしそれでも大陸人の序を付したいという願いが、同じ撰者を顕彰する新刊書に引かれる抄文を、連山はおそらく歓喜して前付したのであろう。それは、けつして異例の措置ではなかつたのである。

つぎに⑧の合刻本とは、駒大図書館の忽滑谷文庫に所蔵される『万善同帰集』との大型合刻本である。全四冊中、後半の二冊が『註心賦』であるが、刊記はない。ただ、『万善同帰集』の巻首には清の世宗が雍正一一年（一七三三）四月望日に撰述した御製序がおかれ、その文中に「心賦」を附刻する旨の所説がみられる。「心賦」といつても、實際は『註心賦』を意味するものである。

つぎに⑨の龍藏本とは、乾隆大藏經への入藏書である。〔郡〕字函、つまり第六一四号の六九の四帖が本書四巻である。序跋等はなく、題簽・内題ともに「心賦註」とあり、内題の次行におく撰者名「妙円正修智覚永明寿禪師述」という表記も、いずれも前記⑧の合刻本と同じである。読点はもちろんない。

いったい、龍藏は世宗が雕造を開始させ、つぎの高宗のときには完成をしているが、『心賦』はこれを収める『御選語錄』四〇巻が入藏し、さらに『註心賦』四巻は別個に入藏したのである。『御選語錄』は世宗の親撰であった。

このようにみると、当該の『註心賦』が前記⑧の合刻本を

叶の旧刊語が本版ではなく、嘉興藏本じたいの崇禎の刊記も、当然ながら遺存しない。音釈は巻四の末に追込みの形で存在する。

以上のように、この合刻本は嘉興藏を底本としつつ、内題や撰者名に若干の厳恭的な改変をくわえ、旧刊語や底本刊記を削除したものとみられる。一面、全文に読点を付けたのは読者にとって親切であり、この点では本版は新しいテキストであった。しかし、大型の豪華本という体裁からみても、本版がはたしてどれだけ摺刷され、どれほど流布したかは疑問というべきであろう。

底本とするのは、ごく自然であつたと思われる。じじつ、⑧と⑨はほとんど全同である。ただし、音釈だけは⑧が卷末に一括しているのに対し、⑨では各巻ごとに巻末に分括するという相違がある。しかし、これは竜藏全体の体裁にならつたのであって、『註心賦』だけにみられる措置ではない。

⑩の光緒本は、光緒三年（一八七七）二月に南京の金陵刻経處から刊行された木版の四巻四冊本である。巻末に刻記される施財者名により、本版は一三名の施財によつて成つたことが知られる。その中には、仏教学者として名高い仁山居士楊文会（一八三六～一九一二）の名もみえて注目される。

さて、本版は題簽が「心賦註」、内外題と版心は「註心賦」と不統一である。また、内題の次行におく撰者名は「宋杭州慧日永明寺智覺禪師延寿述」とあり、嘉興藏本系統にくらべて「宋」の一字が増加している。音釈は巻四の末尾に一括しておかれ、以下、施財者名と刊記で終つている。

本文について注目すべき点は、従来本がすべて細注双行のスタイルであつたのに対し、本版では注の部分がすべて改行一字下げの組版となつてゐる。しかも、従来本では注の最初におかれた「註云」の二字を全部削除し、全文に「。」の句読点が付されている。つまり、本版はさきの⑧の合刻本よりも、なお一段と読み解しやすくなつた新テキストといえる。そ

して、本版がつぎの⑪続蔵本の底本とみられることについては、以下にのべよう。

⑪の続蔵本は、一般にもつともよく依用されているテキストである。初版では第二編第一六套第一冊に、他の三種の禅籍とともに収録されている。国書刊行会の新纂版では、第六三巻中に収められている。初版は明治四四年（一九一一）の刊行、新纂版は昭和六一年（一九八六）の刊行である。

注目すべきは、本版の内外題や撰者名の表記をはじめ、本文の組方と句読点が、いざれも前記⑩の光緒本とまったく等しいことである。光緒本も続蔵本も一行二〇字の組方であるから、各行の文字は完全に一致し、天地も完全に揃つてゐる。こんなに一致するテキスト同志を、筆者はあまり見たことがない。

一方、異なる点といえば、音釈である。光緒本ではわずかに古本の伝統的な形式をとどめていた細字双行が、続蔵本では用いられていない。たとえば、前者では「粵_{音曰語}辭也」とあつたのが、後者では「粵音曰語辭也」と組版されているのである。音釈の組方に関するこのような扱いは、大日本正統蔵経の全体的な統一措置などではけつしてない。また、光緒本と異なる他の点は、施財者名と刊記がないことである。

続蔵経は、各収録テキストの底本をどこにも記さないの

が、学術的な短所といわれる。その理由は単純でないが、こ

と中国禪籍についてのみいえば、底本に改変をほどこしたり再編したりしているものが多いからであると思われる。⁽⁶²⁾ この『註心賦』にしても、⑩の光緒本を底本としているならば、なぜ音釈の組方を変えたり施財者名や刊記を削除したのであらうか。それは続蔵經全体の問題であるが、原本に忠実でないテキスト提供という編集者の姿勢は、今日的な学問的視座からみれば、はなはだ遺憾の一語につきよう。

六 『心賦』と『註心賦』諸本の系統

われわれが、ある典籍についての異版や異本類の系統を知ろうとする場合、それらのテキストに付せられる新旧の序跋・刊記・刊語・識語等は大きな資料源であり、そこに底本に関する所説があれば、もつとも判別が容易である。ところが、それらがない場合は、内外題・撰編者名・文体・版式・音釈の有無などの外的特徴の対比や、本文字句の直接対校がどうしても必要となつてくる。

異版や異本の多い典籍にあっては、ほぼここに並びたてた順に、労力・時間ともに易から難の仕事となつてくる。これは、文献史研究の宿命であろう。その点、大正蔵經収録書の多くの典籍のように、対校を記す校注がある場合は、それを基準とすることができるから、後人を裨益するこというまで

もない。

『心賦』と『註心賦』については、これまでに考察したところによつて、異版・異本一九種の半数以上の系統はすでに明らかとなつている。また、記録だけによつてしか知られぬテキスト三点は、そのテキスト以前のものを承けているといえるだけで、それ以上は推定の域を出ない。残るは数種である。

いま、きわめて事務的にいえば、『心賦』は『註心賦』の一部分にすぎないから、『心賦』同志を対校しても、その貸借関係はわからない。『註心賦』のテキストを併せ行なわなければ、目的が達成できないことは、いうまでもない。そこで、両書のうちでそれぞれ文献的に重要とみなされるテキストをえらび、「心賦」の部分だけながら全文を対校すれば、かならず何らかの傾向が知られ、それは各本の系統を明らかにするべき資料となるはずである。

こうした考え方から、『心賦』では大内版・御選本・心髓本、『註心賦』では高麗版・嘉興藏本・続蔵本の合計六種による対校を試みた。その結果、文字の相違を便宜上続蔵本の該当頁・段・行によつて示したのがつぎの対照表である。なお、相違文字については、正俗関係は無視し、頻出する文字の場合は初見の場合のみにとどめた。

『心賦』と『註心賦』の諸本と系統（椎名）

二六八

懷劫榜溼華齊猶則神絃泓像談餐揩筭飢聰拂惣詔圓標珠
休談但

高麗版
(註)
1397

擴利榜濕花恒似明衆弦弘象焰浪楷 „ „ „ 听枒捲名园 „殊
体焰位

大内版
1410

懷劫榜潛華齊猶則神絃泓像談餐揩 „ 機 „ 聽柝總枒圓標珠
休談但

嘉興藏本
(註)
1628
~34

„ „ „ 溼 „ „ „ 神 „ „ „ 談 „ 楷 笏 „ „ „ 析 „ „ „ „殊
“ 論
“

御選本
1735
~8

„ „ „ 榜濕 „ „ „ 神弘宏 „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „ „

心髓本
1887

„ „ „ 榜溼華 „ „ „ 絃泓 „ 論 „ 揩 „ 翳 „ 柝 „ „ „ „珠
“ 論
“

統藏本
(註)
1911

„ 一 一 一 „ „ 一 „ 九 „ 九 八 九 七 九 六 九 四 九 二 九 一 九 ○ 八 九 八 八 五 『 八 四
○ 三 二 一 c c b b a a b b a a b b a a c c a a b b a a c c b b a a
c a b c c b b a a b b a a b b a a c c a a b b a a c c b b a a
—
— 三 二 一 二 九 一 八

同上
(新纂版第六三卷)

體靈暝橫渡迴以而臨色闔以鹹牀被價具鷄煙冥掘澥絕笑萬航辯
了辯

休『映機汎回之』声暗而噯床披便『雞烟明楣海純唉方舫辨了辨

體林暝橫濶迴以而靈色闔以鹹牀被價異鷄煙冥掘澥絕笑萬航辯了辯

“ “ “ “ “ “ 遺 “ “ “ “ “ “ “ “ “ “ “ “ 雞 “ “ “ “ “ “ “ “ “ “ “ “

“靈”“廻”“臨”“披”“具”“烟”“辨”
“辨”

一〇四 a — 二
一〇五 a — 一五
一〇六 a — 六
一〇七 a — 六
一〇八 a — 一〇
一〇九 a — 一七
一一〇 a — 六
一二〇 a — 一七
一二一 a — 七
一二二 a — 一四
一二三 b — 四
一二四 a — 一四
一二四 b — 一四
一二四 a — 二四
一二四 a — 一五

准枝聞貞實跡十冰證喻萬唯捧華義綿鴻窮災跡折旨聰城蔭探手籍

淮根開真宝迹一水瑩用功推棒花又〃洪穹灾跡析音捄誠陰探千謝

准枝聞貞實跡十冰證喻萬唯捧華義〃鴻窮灾跡折旨聰城蔭探手籍

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

準〃開真〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

〃〃聞貞〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃縣〃〃災〃折〃〃〃陰〃〃

〃〃一 一 〃 一 一 〃 〃 〃 一 一 一 一 〃 一 三 一 一 一 一 一 二 一 一 二 一 一 二 一
 四 四 一
 六 六 三 一
 b b c c b b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c b c
 一
 三 三 五 九 九 四 二 五 五 五 八 一 八 四 二 ○ 四 六 ○ 五 六 一 六 二 一 一 一 一 一 一 一 一
 一

剋丹恒心殞其滅唯巖證求弄

刻形常高隕具岩進論用行求

剋丹恒心殞其滅唯巖證求弄

" " " "

刻恆" "

剋恒" "

一四七a—二
" b—一〇
一四八a—一六
" c—一八
一五〇a—一
" a—一八
一五一c—二三
一五二a—六
" a—一二
一五四a—一三
" c—一二

右表の相違文字の中には、明らかに烏焉馬の類もあるが、まったく異なる文字も少なくない。この対照表によつて明瞭に読みとれる事項をあげると、つきの諸点となろう。
(一) 大内版は、他の諸本とは異なる独特的の文字が圧倒的に多い。
(二) 大内版は、北宋期の真宗・仁宗の避諱文字を遺存している。
(三) 高麗版・嘉興藏本・御選本は、きわめて近似している。
(四) 心髓本は嘉興藏本に近似しているが、また大内本とのみ一致する文字も少なくない。

以上の四点であるが、(一)について補足すると、真宗(九九八～一〇一二在位)の諱は「恒」で避諱文字は「常」、仁宗(一

〇一三～一〇六三在位)の諱は「貞」で避諱文字は「真」である。ところが、諸本がみな諱の文字を使用しているのに対し、大内版のみは「常」(統藏の一四七c—一八の個所)と「真」(同一四四b—五)を用いている。このことは、大内本は仁宗の即位年時(一〇一三)を上限とする北宋期の古版を承けていることを示唆するものである。

大内版『心賦』は、第二節で考察したように、至正一〇年(一三六〇)に永如が『藏乘法数』を重刊した際に附刻されたものを原本とする。すると、この幻の元版テキストの『心賦』は、直接か間接かは未詳ながら、北宋期のテキストを受けた可能性が高い。『心賦』だけの宋版が確認できないとすれば、むしろ『註心賦』の北宋期の刊本を承けているのかも

しれない。しかし、『註心賦』は北宋版—紹興三〇年版—高麗版の系統はまちがいないと思われから、北宋から南宋にかけては、まったく記録のない他のテキストが存在したのかもしれない。

嘉興蔵本は重要な地位にあるが、底本としたのは翠山妙叶の刊行した洪武本であることは、すでに前節でみたところである。その洪武本は伝本がないので、祖本は直接の手がかりがない。しかし、先行する三本の中では、南宋版か元版かのいづれかを承けるのであろうから、いまは地理的に近接した臨安近辺から紹興三〇年に刊行された南宋版を底本とするを考えておきたい。

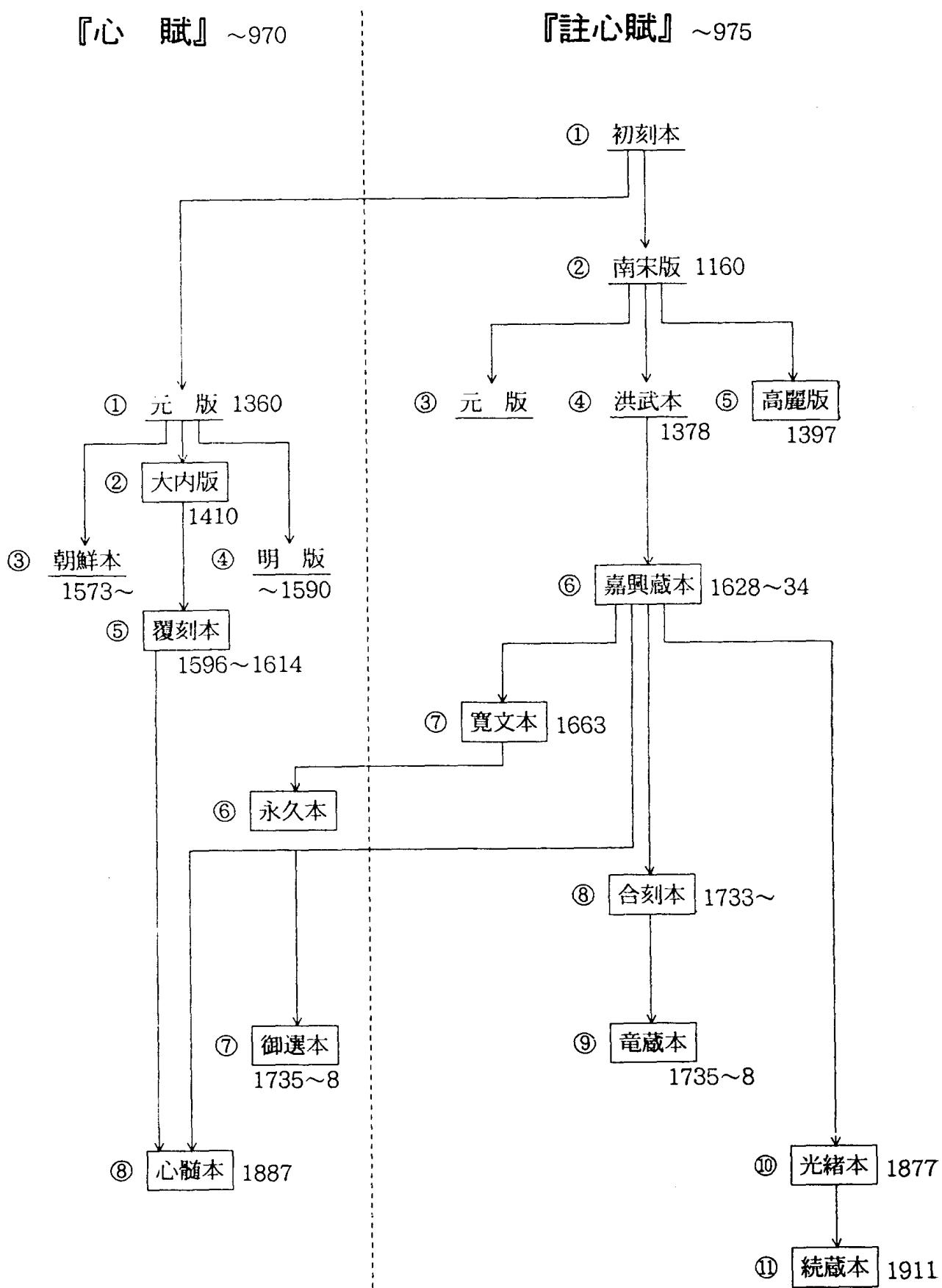
さて、『心賦』にもどり御選本であるが、文字が嘉興蔵本と近似の関係にあること、『御選語錄』中のテキストという権威を必要としたことなどを勘案すると、やはり明末の入蔵書である嘉興蔵本から「心賦」の部分だけを採録したものではないであろうか。

また、心髓本も嘉興蔵本と文字はほぼ同じであるが、大内本とのみ一致する文字も少なくないという注目すべき事実がみられる。その理由は難解であるが、心髓本の刊行はすでに清朝末期であるから、大内版の原本である元版を閲覧する可能性よりも、むしろわが近世初期に刊行された大内版の覆刻版を見て参考したと考えておきたい。

さいごに、『註心賦』の光緒本について考察しておかなければならぬ。前述のように、このテキストはわが続蔵本の底本テキストとみられるから、その立場は重要である。ではその原本はなにか。この点、前掲の六本対校表の範囲だけではあるが文字の異同を調べると、先行諸本の中ではやはり嘉興蔵本にもつとも近い。ただし、註の首部にあるべき「註曰」がすべて省かれていることは、前述したとおりである。

したがって、光緒本は底本を嘉興蔵本とし、注の部分の組版を改めて「註曰」を削除し、かつ全文に句読点を付して読みやすくしたテキストであったとみてよいであろう。なお、本版には清版特有の欠筆文字（玄・胤・弘など）がみられることも指摘しておきたい。

以上、『心賦』と『註心賦』の諸本についての系統を考察した。すでに前節までに闡説したものについては重複を避けたが、およそ全部のテキストに対して、可能なかぎり言及したつもりである。さいごに、これら諸本の系統を図示して参考に供したい。



* [] は現存本

注

- (1) 『五山版の研究』(東京、日本古書籍商協会、昭和四五年三月)
上巻、二頁。
- (2) たとえば『六祖壇經』二巻(京都、興聖寺)、『禪門諸祖師偈頌』二巻(早大)など。
- (3) 森江俊孝「『心賦』と『註心賦』について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第一号、昭和五四年八月)、『仏書解説大辞典』第六巻(東京、大東出版社、昭和八年一一月初版)一六一頁b～c。
- (4) Z六三一一六四c～一六五b。
- (5) 朴相国編著『全国寺刹所蔵木版集』(ソウル、文化財管理局、一九八七年一二月)四八五頁。
- (6) 『五山版の研究』上巻、二四八頁。および四一一頁。
- (7) 二一九頁。
- (8) 国立国会図書館参考書誌部編、昭和四四年三月、同館刊。
- (9) 東洋文庫日本研究委員会編『岩崎文庫貴重書書誌解題』I
(東京、東洋文庫、平成二年五月)六一頁b～六二頁a。
- (10) 東洋文庫図書部編『東洋文庫所蔵漢籍分類目録』子部(東洋文庫、平成五年四月)一四三頁a。
- (11) 『^{所蔵}国立国会図書館貴重書解題』第一巻、五一頁b～五一頁a。
- (12) 『五山版の研究』上巻、二四八頁～九頁。『国史大辞典』第二巻(東京、吉川弘文館、昭和五五年七月)五一二頁c～d。
- (13) 以下、この序跋を参考までに掲載する。可遂の序は序題がなく、余闕の跋は「藏乘法數後序」の題がある。なお、後者は「四部叢刊統編」集部影印の『青陽先生文集』卷四所収文によつて対校しておくる。

圭峯定慧祖師、衆凡欲解了経論、先須明識法義。依法解義、^ニ即分明、以義照法、^ニ即顯著。故先德、於経論中、撮掇諸法之名体、目曰法數。学者得之、則於法於義、了了無惑、誠為啓迪、來蒙之良範也。伝之既久、差舛弥多。今濡須無学文公開士、欲新板本、囑余較正。觀其大志不敢、以暗証辭特、為道捨経論、參對旧本、差悞者正之、繁亂者理之。教乗身土諸文、同異者会之、因行果徳階降行布者□之。更於性相本末、略示宗源、集來方冊、少助流通。如維摩、所謂但以數故說為三、無罪謂菩提有去來。今学者、所當知也。時元祐甲戌仏示生日 合淝明教退隱寂知道人可遂謹題

藏乘法數後序^{*1}^{*2}

天下之書博者、未嘗無要法。五声十二管、可以尽天下之音声、^{*3}十千十二支、可以尽天下之甲子。象形指事、^{*4}転注諸声、会意假借、可以尽天下之文字。其統之有宗、其会之有元、充之而不窮、合之而不遺。知者創物、其有功於世類、如此仏氏、有法數書、^{*5}會萃名義、而三藏十二部之理、無不在誠要法也。西菴遂公、罷講游方廿年、歸乃取而脩訂之、補其所未備、白其所未明、去其所未安、明性相析機、宜刊定名体、目曰藏乘法數。濡須有道之士文公無学、以衣資若干貫刻之、^{*6}版以惠四方。昔邵子^{*}皇極經世、以元会運世衍、為十二万九千六百年、以尽事物無窮之變、其文博其義富、蔡西山撮其機、括為指要一編。其有功於邵子大矣。遂公之書、是亦大藏之指要。与余讀伝燈、婆子請趙州転經、^{*9}州繞禪床一帀云、転經已。婆云、只転得半藏。半藏全藏、姑置勿問、五千四十八卷、一周行頃、何為而転之。此父西菴、

不伝之妙因。書之卷末、在学者所自得。

元統甲戌五月晦日^{*11}

合肥余闕謹書之巖山中

1数一疏（以下同ジ） 2以下「続増」トアリ 3千一千 4注一註

5「三」ナシ 6游一遊 7廿二十 8版一板 9「州」ナシ 10

市一市 11（以下ノ一八字ナシ）

（14）王德毅等編『元人伝記資料索引』（台北、新文豐出版、民国六

八年一一月）第一冊、三五五頁。

（15）この跋文をつぎに掲げておく。

題永明智覺寿禪師唯心訣後

永明寿禪師、平生著述甚多。唯心訣者、其猶般若之心經也。孫城祐上人、頃作觀心堂於廣福寺、及見西菴遂公明教臺得是編、即以衣資刻之、甫畢工屬。余帰自范陽、詣題其後。心者万化之原也。迷則愚、悟則聖、存則治、亡則亂易。所謂、差之毫釐、繆以千里者、正指是言也。是編於心之細、無不燭体用、無不該三藏、十二部精要之言、無不在是先。民言聖賢、千言万語、只是欲人將己放之心、約之使返復入身來、自能尋向上去、此又永明著書立言之心也。元統甲戌五月謹題

（16）韓國文化財保護協会編『文化財大觀』国宝2（ソウル、大學堂、一九八六年九月）には、趙明基・趙炳舜両者の所蔵する高麗版『藏乘法數』各一冊が掲載され、それぞれ簡単な解題と卷首の写真一葉がみられる（一四六頁、二四七頁）。それによれば、

この二点はともに一三八九年の李檍の跋をもつ高麗版であり、趙明基の本には無学自超の刊語、趙炳舜の本には中国の湛露坊寿慶寺留版の刊記が刻されているという。湛露坊寿慶寺は未詳であるが、黒田亮氏が『朝鮮旧書考』（東京、岩波書店、昭和一五

年一一月）の中でも、不明寺院から刊行された仏書目の一につに法露坊寿慶寺の『藏乘法數』（洪武二二跋）を掲げている（九〇頁）。

この著録がおそらくは右の趙炳舜氏の現蔵本であろう。

（17）「中國方志叢書」華中地方86『續集廬州府志』（台北、成文出版社、民国五五年）。三三一七頁b。

（18）『五山版の研究』上巻、二四八頁。

（19）川瀬一馬『新修成竇堂文庫善本書目』（東京、お茶の水図書館、一九九二年一〇月）によれば、成竇堂文庫に二部所蔵する『藏乘法數』はいずれも大内版の覆刻版であり、慶長頃刊としている（五三四頁b、五三五頁a）。したがって、小稿もその説にしたがっておく。

（20）五九頁。ただし、該書の所蔵者については何の記載もない。

（21）「中國仏史志彙刊」第一輯（台北、明文書局、一九八〇年一月）第一九冊、一八〇五頁～一八〇七頁。なお、この引文の存在を最初に指摘したのは前掲（3）の森江論文である。

（22）東洋文庫所蔵の明版による。なお、王世貞の『弇州山人四部稿』一七四卷の中には、この「心賦序」は含まれていない。

（23）この竜藏所収の『御選語錄』四〇卷は、へ中国仏學文献叢刊として一九九三年一二月に北京の全国図書館文献縮微複制中心から一冊本に影印出版され、斯学を大いに裨益している。

（24）卷七の末尾に所蔵されている。前項注（23）『御選語錄』一五〇頁b～一五一頁a。

（25）拙著『宋元版禪籍の研究』（東京、大東出版社、一九九三年八月）四八四頁を参照されたい。

- (26) 前掲注(16)『朝鮮旧書考』八頁。および大屋徳城「高麗朝の旧槧」(『積翠先生華甲寿記念論纂』(東京、凸版印刷、昭和一七年八月)七三頁～七四頁)などを参照。なお、筆者が閲覧した高麗・李朝刊行の仏典類にもこのようなものが多い。
- (27) 前掲注(21)一七五五頁～一七五六頁。
- (28) 『宋史』(北京、中華書局)卷四八〇、錢惟治伝(一三九一〇頁～一三九二三頁)。
- (29) 鈴木哲雄『唐五代禪宗史』(東京、山喜房仏書林、昭和六〇年一月)前編第三章第四節。賴建成『吳越仏教之發展』(台北、私立東吳大学中国学術著作獎助委員会、民国七九年四月)第二章、および第三章。
- (30) 『宋高僧伝』卷二八の延寿伝(T五〇一八八七b)および『永明道蹟』(Z八六一五七a)などによる。
- (31) 『仏祖統紀』卷四四、建隆二年の条(Z七五一六五六c)。
- (32) T五〇一四一五b。
- (33) 『宗鏡錄』の現行本巻首におかれている楊傑の序文中に、「初吳越王序之、秘于教藏。至元豐中、皇弟魏端獻王、鏤板分施名藍。四方学者、罕遇其本。」(T五〇一四一五a)とある。
- (34) 「長沢規矩也著作集」第三巻『宋元版の研究』(東京、汲古書院、昭和五八年七月)所収「宋刊本刻工名表初稿」および「阿部隆一遺稿集」第一巻『宋元版篇』(汲古書院、平成五年一月)所収「宋元版刻工名表」を参照。また尾崎康『正史宋元版の研究』(汲古書院、一九八九年一月)の七六頁と二五〇頁～二五四頁には当該の『漢書』についてのくわしい解説がなされている。
- (35) 善彬については『咸淳臨安志』卷七六の千頃広化院の項に
- (36) 「³⁵楊松嚴寺妙嚴尊者塔銘」(朝鮮總督府編『朝鮮金石總覽』下(東京、國書刊行会、昭和四六年一一月再版))一二八〇頁～一二八三頁参照。
- (37) 前掲註(26)の大屋論文中、崔南善氏の所蔵する高麗版『人天眼目』の紹介記事による(八七～八九頁)。なお、崔南善氏の蔵書の多くは六・二五動乱後に高麗大学に寄贈されているので、現在は同大学に所蔵されている可能性が高い。
- (38) 北京図書館編『北京図書館古籍善本書目』(北京、書目文献出版社、一九八七年七月)子部、一六一一頁。

- (39) 前項註(38)、一六一二頁。
- (40) 『糸門正統』卷八の元照伝(Z七五一三六二b～三六三a)、何澹撰「靈芝崇福寺記」(『咸淳臨安志』卷七九)「宋元地方志三十七種」(七)、台北、國泰文化事業有限公司、一九八〇年一月)、四六一八頁b～四六一九頁b)などの伝記、および元照の著作を調査した結果による。
- (41) 前掲注(25)拙著五二六頁を参照されたい。
- (42) 前掲注(38)、一六一一頁。
- (43) 古書目を調査すると、明末の『脈望館書目』旧板書の項に「心賦四本」の著録がみられる。『註心賦』四冊を意味すると思われるが、宋版か元版か未詳である。また、同じく明末の『澹生堂藏書目』第一冊中に「心賦註四卷四冊」と著録されるが、これも版別が記載されていない。これらの著録については、前掲注(25)拙著四七八頁と四八四頁を参照されたい。
- (44) 昭和法寶總目錄二一三二四a。
- (45) 「中華大藏經」(台北、修訂中華大藏經会、民国五七年春)第二輯第七八冊、三三一二四四頁影印。
- (46) 前項注、三二二四二頁a～b。
- (47) Z六三一三〇a。ただし原本には「如叶由來書」という題名はない。宇井伯寿氏が岩波文庫本『頓悟要門』(昭和一三年七月)の解説中に「妙叶の由來書」と述べてから云われるようになつたのである。『禪の語録』6『頓悟要門』(東京、筑摩書房、昭和四年三月)でも平野宗淨氏は、この一文を「妙叶由來書」として扱っている。
- (48) Z六三一七c。
- (49) 前掲注(47)、宇井伯寿『頓悟要門』後記、一四九頁。
- (50) 前掲注(47)、平野宗淨『頓悟要門』解説、二一九頁。
- (51) T四七一三五五a。
- (52) 『護法錄』卷一所収。(中華大藏經(台北版)二一八四一三四五八四頁a)。
- (53) 「中國仏史志彙刊」第三輯13、八七頁。
- (54) 「四明叢書」第四集所収『四明山志』(江蘇、廣陵古籍、民国二二年。卷二、二九丁a)、「四明翠山禪寺志略」(『中國仏史志彙刊』第三輯13、四〇～四一頁)。
- (55) T五〇一八八七b、T五一一四二一c～四二二a。
- (56) 『四明翠山禪寺志略』によれば、「太洪武六年癸丑、著曰僧起信、募重刊張即之所法華經板。」(『中國仏史志彙刊』第三輯13、四七頁)とある。
- (57) 曹洞宗出版部編『曹洞宗近世僧伝集成』(東京、曹洞宗宗務厅、昭和六年八月)の連山交易の項には、連山に関する四種の伝記記事が集められている。この項を参照。
- (58) 『帰藏稿』は「曹洞宗全書」語録三、『帰藏采逸集』は「続曹洞宗全書」語録一、にそれぞれ収録されている。
- (59) 前掲注(57)『曹洞宗近世僧伝集成』九六七頁b。
- (60) Z八六一五七a。
- (61) 続藏本になくて明暦本に存在するものは、絵図三三葉のほかに尾題の直前におかれる木記「明暦元乙曆七月中旬／中野是谁梓行」、および大壑の跋の後におかれる「古歎(黄銘江極黄心洪存等梓行)」の原施財者名である。これらは続藏本が削除した可

能性が高い。ただし、本書の序者を明暦本は陶堅齡と印刻しているが、続蔵本では陶望齡と正しい人名になつてゐる。

(62) 前掲注(25)拙著、三六九～三七〇頁を参照されたい。

* 脱稿後、北京版「中華大藏經」第八二巻中に竜藏本を底本とした『永明心賦註』四巻が影印収録され、これを嘉興蔵本で対校していくことを知つた。しかしその校勘記をみると、本文字句の異同についてはほとんどが鳥焉馬の類である。したがつて小稿で検討した『心賦註』の⑥⑧⑨三本の系譜関係は、かえつて補強されることになるであろう。